

大腸低分化腺癌切除例における臨床病理および予後因子の検討

橋本 竜哉¹⁾ 星野誠一郎¹⁾ 三上 隆一¹⁾
平野 公一¹⁾ 松尾 勝一¹⁾ 篠原 徹雄¹⁾
山内 靖¹⁾ 志村 英生¹⁾ 乗富 智明¹⁾
山下 裕一¹⁾ 中山 吉福²⁾

1) 福岡大学外科学講座消化器外科

2) 福岡大学病理学講座

要旨：大腸癌切除例のうち、低分化腺癌を高・中分化腺癌と比較し臨床病理学検討を行うとともに、予後因子の検討を行った。低分化腺癌の発生頻度は2.5%で、高・中分化腺癌と比較して、右側の発症率、深達度漿膜浸潤以深の症例が有意に多かった。低分化腺癌の5年生存率は58%と高・中分化腺癌と比較し有意に低かった。しかしながら根治切除が得られた症例において、差は認めなかった。低分化腺癌の予後因子の検討では、リンパ節転移、肝転移、腹膜播種、根治度が予後規定因子として有意差をもって選択された。低分化腺癌は、それ自体は予後規定因子とはならず、根治切除が可能であれば高・中分化腺癌と同等の予後が期待できるものと考えられた。

キーワード：大腸癌，低分化腺癌，予後，臨床病理学的検討